

鈴鹿第一気象連隊

群馬県 内藤 芳夫

私は群馬県岩鼻町の川魚料理店の長男に生れました。食品を扱う業者は、昔からいかなる人も日に三度も食べるので「飯の食いはぐれは無い」等と言われたものでした。私の店は一般食堂と違って朝早くからのお客はありませんが、料理店でるので歓送迎会や昼食会とか、何人もまとまつてのお客様がありました。そのため時間になるとてんこ舞の忙しい商売でしたが、お蔭様で何代も続いた「しにせ」として顔なじみの常連客なども時々座敷を利用して下さると言う恵まれた家庭で育ちました。

そして当時の中学校から大学まで進学させてもらい、東京の早稲田高等学校での学生生活には、毎月親からの仕送りで充分でしたのでアルバイト等もせず一生懸命勉強に励んでおりました。

昭和十六（一九四一）年十二月、日本は国際連盟の経済制裁に追いつめられて米英等の大国に宣戦布告をして第二次世界大戦が始まりました。戦後のテレビで見たのですが、当時の海軍大将山本五十六閣下が天皇陛下に「一年か二年なら持ちます」と奏上申し上げたと言われているように、開戦当初の日本軍は陸軍も海軍も連戦連勝でありました。

しかしあまりにも大きく戦線を拡大し過ぎて、兵員の不足を招いた大本営は、ついにそれまで学生の徴兵を延期していたものを、昭和十八年に学徒動員令を発動して学生の動員を開始しました。文学部の学生は二年延長になりました。

私にも昭和十八年十二月に動員令状が来て、鈴鹿連隊第一気象連隊に入隊し、同隊で初年兵教育を六カ月ほど受けました。初年兵教育中に私は幹部候補を志願しました結果、甲種幹部候補生として仙台航空予備士官学校へ入校させられ、士官教育を約三カ月受けた後、昭和十九年十月、東京陸

軍気象部へ転属して気象関係業務に従事しました。

現在ですと例えば台風が発生した場合、風速三五メートル、気圧九五〇ヘクトパスカル等と発表しますが、その当時は気圧九五〇ミリバールと発表しておりました。気象情報を最も必要とするのは空軍はもとより、海軍も気象情報は絶対に欠かせない必要情報なのです。とくに特殊潜航艇等は命にもかかわる重要情報ですので、我々も気象状況の判断には真剣そのものでした。当時は現在のよう気象衛星等はなかった時代ですから現在ほどの確実性はなかったと思います。

昭和二十年の春になって広島市の近くの船舶司令部へ転勤となり、気象業務に従事しながら船舶気象教育隊の教官として勤務しておりました。

夏になって連日暑い日が続いたある日の朝、いつもの通り朝の点呼の最中に、眼前に整列していた約百五十人の初年兵が突如として一人もいなくなりしました。忘れもしない昭和二十年八月六日の朝のことです。原子爆弾によって突如地上の高温

により地面が真空状態となって、百五十人もの兵隊が一気に空中高く吹き飛ばされていなくなってしまうのです。

私には何が起きたのか、ただ啞然とするばかりでした。稲妻のような光も百雷のような音も、その後でした。爆心地から三キロか五キロぐらいはあったでしょうか、幸い私は被服も燃えず、宿舎にも被害もなく一命は助かりました。これまで東京、大阪、神戸等の大都市は何度も空襲を受けて、焼野原になったのに、広島は一度も空襲を受けず、市民は安心していたところへ突然の原子爆弾で、跡形もなくなつたのです。

それから一週間ほどして北海道小樽市の船舶司令部へ転勤命令が出ました。今度は涼しい所へ行けると喜んだ翌日、汽車に乗って青森駅へ向いましたが汽車の窓はほとんどガラスのない車両でした。

青森駅で青函連絡船を待っていますと、乗客が戦争は終わったと話していますので聞いてみます

とラジオ放送があつて日本はポツダム宣言を受諾したとのことで敗戦を知りました。そして、そのまま任地の小樽船舶司令部へ着任しましたが格別仕事もなく、十月下旬ごろ、動員が解除されて帰途につきました。

将校の衿章も肩章も取つて兵隊の服で青森駅へ着き、ここで初めてアメリカの進駐軍の兵隊を見ましたが、格別敵意も感じませんでした。米軍兵士から頭や股間にDDTを振りかけられて、毛じらみの消毒をされて汽車へ乗つて、はじめて敗戦国になつたんだなと言う感情が出て来ました。上野駅に着いて浮浪者の姿を見えますます敗戦を意識させられました。

自宅へ帰つてしばらくは居候のごとく何もせず過していました。昭和二十年十一月に早稲田大学へ復学して勉強のやり直しをしました。翌年の九月に論文を提出して卒業証書を手にすることが出来ました。そして昭和二十一年十一月、東京の日本取引と言う会社へ就職しました。

昭和十五年ごろでしたか食料や衣料などいわゆる生活必需品は配給制度となり、昭和十九年ごろからは、その配給も来なくなり、国民の多くは闇物資に頼らないと生きて行けない状況となりました。食堂も菓子屋も呉服屋も閉店して、開業してるところは都会にも田舎にもありませんでした。私は料理店も食料の仕入れが出来ず閉店しておりましたが、昭和二十三年の後半から徐々に少量ではありましたが川魚等が入るようになりました。そこでサラリーマンでは収入が決まっている上に毎日時間に縛られて窮屈な思いをしており、これに対して自営業は時間を自分の意志で使えることと、営業の成績いかんによつては収入も格段に差が出ると思つたことから、昭和二十三年に会社を退職して自宅に帰り料理店を再開しました。

店は順調に軌道に乗り、満足しておりましたが、広島で受難した原爆症のため時々通院治療を現在まで続けております。この医療費は支給されますが、爆心地から被爆地までの遠近によつて被爆者

手帳はなぜか支給されません。

地球上で現在被爆体験をした国は日本だけですから、私も声を大にして世界に向けて原子爆弾の廃棄を訴えたいと思います。

被爆から六十年も経て私も老齢となりましたが、幸い子や孫に囲まれて、現在は余生を安穩に過しております。